

冬乃日辨議

冬の日辨書

序

元祖色羨翁又俗潜の系集を
まゝありそれハ中より七巻已
撰之振て之を七巻と号す
いとゆふ冬の日を始として
定々倦よるも 律又は之を
多氷繼と稱するはらく



閑とらるよ七あそひハ七色の流氷
阿毛たとり佛の五時ハあある
このことくあこの夕ハ華一歳は合
の時一と二根の生ハ年を
おちとん奥又つう古友者鬼
この深く古まとも新きて阿まの
物俳よしそ其味もあつめんと
初本巻心ハのあつ又たこのことく

海議をもはくまうまじむ
行をも脱せぬしてき急そら
るもろあ下よあくる成やつれ
そいさ所ハの徒ハ朽るんとをさ
みしまう生あ校のいさま校
合して小舞子とをさあ

享和三年 陸 日

遅り巻

衛足老人

冬乃日集辨議

列 三

秋齊觀有免著述
栗谷下宇考補助
遅日菴衛足考訂

あゝ此日 尾張五哥仙其一

此の途の二回よはころひ紙衣の洵くの
心月よとめりてひききききききききききき
阿をれよおろくくるむ ね奇の文士
はあよととりしとて不承とてちてりて

ねとこりしのちハ下新よ似るハ芭蕉

此句那きくししの記りよめて貞享元年
の初より又復をへるふ金中の次はわろ
吹志くゆるしの旅りあそび死すすー風の
方とハ地をいする長途の憔悴も又
又此来さくめぬ風その境界を形容
せりけさそけいむー狂家の竹糸はふ
みさとりぬる何うさるも初そみるくーと
已つ風程のやけき成記のふ歎息治
りけ○原牛よも狂句風のと續てて

加らりされとは二字を題して句中の
語まはるくーい能くを面白とらふ
早下の称なりん

後そやとくーるひまの山菜花 野水

竹針ともソリはるさ地人の通るハ誰そ
やと立出アスー旃の脇る竹針ともソリはるさ地人の通るハ誰そニかす竹針ともソリはるさ地人の通るハ誰そ二境
ささぬとアスーてとくーるといふあを射

やとけささぬとアスーてとくーるといふあを射
山菜花の挿さる風狂をいつるさるー或物よ

竹并海老よけは我府後やと云説有り

有明のま水は湯を伝くせく益号

秀歌を詠して英名を稱する新待者の

小侍従もこの花人るとさみあまごあり

けき明のま水もそけつよ效ひて設けし

名をよつ一冬奇よあやしく人よ何を伝

せしてつる雅俗のおしと流階といふ山

菜花のま水もは狂女つ碎花の徒れををれ

門をそとると入るる眼前の次世附るん

かいらの家をふるふ赤馬重子

米もを酒を造りて力て本木をたよ

まの馬と執巾めれかまの神用はあれ

まの馬か又その名の二字のつらとよし

朝鮮のちろりまのにもひなき杜國

か那の馬たのかくくくくして瘠地のせし

の白ひるまを藍する種るりかいらとよ

とつらまの執巾をこれ朝鮮清陣の

侍るりらよみけることとんけつとといえ

日のちりくよ聖よ米を刈 正平

聖よ刈と八咫稲よして芒よ並ぶる
さむるんちりくちりくはるきよを後日
のやーきさるるー 寂をそく云へるん

家畜ハ詠るよ名うたあううて 聖水
前句の古怪るるをうけて耕てくむ
井を堀て飲といふ隠意のまじり
ふせこまう 歌鳥よ名うたのすのせう子樹下の
居をあり 後日のおせいと結るる

長女をよけるをも母よあめのほと 道雀

情を起して詠るをも母よあめとんぬり
不嫁あるるうまかこあるまゆん名
すの詠をよく掘りし詠るの名ふ僻地
して詠るよ便する神をこれ句い詠と
しん年 長女をよけるをも母よあめとんぬり
まもまもまもまもくの子海人んきと
為差してほまこるん

いつまうのつしと 乳を志ぬう 換 重五

二世と驚きしむ川も此より
まてあふ中を引く付られて成るの
黒ぢるをわぢぢれとせばつらよとて
をもあつちのちやうの所を

ましくぬき塔ぼあよこくと流 後方

無事なるうらうらとく
おさなるもの別かき人のうらわを
塔ぼあよ乳もまきりしゆ常におん

〇ころころのころころとらむは
笑ひけりしもの傍らうらりしを

いみ欵くのこころとらむ〇流ぬき
波あよせめて世をうらうらとら
しも何んよとのこころと含めり〇此
附生を死に換穿して越の端を

新法の時えさふく火を焚きて 芭蕉

まの傍よ火をたたるまのまの又ハ家の上の廬よ喪と
身むけて困よまきりしゆ常ももの常
勤ふせのともえりへ一他氣をとるの句とあつて幸の
白と後へ奪よあるのる換穿して相ころころ

何のハ分りよたえ 虚家 杜玉

蛇の腹下せ 虚家よ采田よあつて

一夜はく守きける風情をもよお
凄ふもやうに附なせり

田中るる小おんう柳をくひ 萬等

かゝるは秋の柳さびしうを合せ

うり程は柳ハ伊勢の山田の片にとり

よまて小百とつる女の力を投しあつて

とやまけ恨の石はひ一室よ山雲さるるを

つふほせかゝりも餘情よこめつらん

や務よみひく人ハちんむら 聖水

や柳よ宮川の光をよすちんむらのやう

尺方れきううおうみ補をく

やまそくを撈よ詠の月をよ 杜國

横よ詠はよみやを形容わたり

隣さうよ所よありみる 重五

夕陽の空をよみ細くお詠の風情を

を物思ひと起し 湯所こころはゆる

よのこをよ産よ下右にたつるに附

るをうさるより 懐さうよまよふにや

ちぐはぬの字あつてあしめと訓をさ
しらい昂後言こ人の徳をとをふ陸
よりひ弘めつうの人情をさしきく

二の尼子近湯の花は盛きく 那水

崩御の時寵を蒙り官女の先刺方をと

一の尼子らひ次よ刺するを二の尼子らひとそ

〇七十六代近衛院崩御はまがらひ保元平治

の乱はけいけい後素むらう人の〇花のむら

とふは世のさうのこしをささくといふ事なる

もよきくのさあけいけい二の尼の流るゝて
おもむきを憐れむ市中の女るとは世
のけいけい問まいつゝる神をんをけい
けいけい二の尼とけいけい二の尼と章と
喋ハ津又とむくり白糸うきと 芭蕉

十六の二の尼の答つたけいけいけいけい
けいけい物毎の花をさしきく
けいけいけいけいけいけいけいけい
けいけいけいけいけいけいけいけい
けいけいけいけいけいけいけいけい

さしてはゆいふせいのを象々むむと仇する
きふ物よは層もく顔おひらるるを重五
面をたぐる男のまへにねほきまゆ神
ちりちてまへにのりごと君のかつこのこと
久くこれいふあいつはよきまよとて
おのれう力を増ふ比してすうしめを
神とまうと層もく顔もくん送り欲く
容所
まゆは防みせりきふ物とりつりし事とて
忘るん、源氏の君のおひひ人は遠生

の君とりあけり柵やあ裁のあれさるま
物語もさるもさるわたりともいそん

今そ恨の矢をさるるうき 若う

きあおるるハ君父の仇もいそんあゆの
形勢かさるること 愛ふ勢にめをとせり

盗人の記念の松の吹さるれて 芭蕉

まわ那重あいのちまわあおちと仇と業嵐
名と得る強盗と埋しはるの松とさるる今も
吹おちりあまの幽鬼あはれおちまひま
まを安枕の強して烈風あまの松と怪りま
攻討あまのまをまをまをまを列

同本郡と郡とをくまなく東都列宗祇より古今と
すめりし事ありんば其理なきゆゑに不指人
信ありし所けふまじき送ありし所ありし事四段に
のちとありし事あり

多る枯りてひとり 唐 比 野水

かきめりしもぬりしも前への志ありな
礼の意ありきも時あるのりきをも助けて
この草木のみまきくと花きりしさゆを
いなり

あゝと碎し人の身なり 何 杜玉
あやちを噴聖の神と見るして枯骨を

竹のうら^{かき}し^又し^はと^と
ひたりとを人能くよひけり 稚き人の
軍場の父の獨器をみるこころの付を
かきめりや

馬 城 ちちひす 杜玉のうらかき 重五
あやのさかめを 沙漠の地と見るこころ
人の身なり 何と問ふらるふこころの馬
城なりしと答へしもやうありし世と焼て
はあひひし 胡ありし馬城をともひ

や又寓えらるる但馬城の早ハ句くして
砕けやすきものこ

おうれさの謎もとく 郭云 聖水

爰ハ忍びすの國とささるるを華人の
詞とする 胡地ハ夜魄也 其の言ハ
しもちきこる 詠を托 述さる 詠を
蜀魂といひ不如歸とる といれ 其を
残さる 思ひ限なるん 台方也 又穴窮
厄の時又用あり

秋ハ一斗 漏れらす 夜そ 芭蕉

時多を誠の謎とて 秋ようつも 水時差
の一斗夜永をいふ 謎ハ夜永のまびこ
此句 軽く 轉を 根柢の 可憐 一椀茶

と云ふ あり 投子 程の 商量 といふ
其典ハ 枕草子 禱 といふ 事也

日東の木子白 坊月を 重五

酒を 盛置 けす といふ 坊月 といふ
いづるや 一斗 詩百篇 といふ 實 永中
石川 丈山 詩 といふ 華人 日東の木子白と

祇を洛の东山に祇仙堂と云ふを
と坊ハ昂は堂を云ふ

中よ木槿をとてさむむ花見色くら 菖蒲

十月月を見人む花見色打とむむの

なよ花見色とてさむむ中よ木の

名のうら花を柳のうら花の酒奥と云ふ

牛の頭とぬらふ草十の夕ぐれよ 芭蕉

牛のしきふん人取とて執向せし行

木槿これふんむとてさむむ花見色

句ハ木槿の用にて花用よ花見色の

字多用の用を先杜うぬありむや何

人のまよとてさむむ花見色の

とてさむむ花見色の

箕つよ花の魚とてさむむ 杜因

延虫て女等の花見色とてさむむ

善の風情なり

我いのまゆりの花見色とてさむむ

花見色とてさむむ花見色とてさむむ

を祈る女のさるるらん方よ子の志の
心算もおの

わらハ妹の眉かきよよゆき せき水

外より妹のぬり粧の眉かきよゆきよ
くしなめよと祈るハ^{いづれ}火の信といふかく
前を軽くたぐる変地自在をいふと
非上着^{ひら}ゆき^{ひら}く^{ひら}を^{ひら}持^{ひら}た^{ひら}す^{ひら}よ^{ひら}の^{ひら}し^{ひら}は
ゆ^{ひら}自^{ひら}を^{ひら}他^{ひら}に^{ひら}祈^{ひら}る^{ひら}て^{ひら}越^{ひら}の^{ひら}端^{ひら}を^{ひら}

綾ひとく居湯よ志賀の花流て杜玉

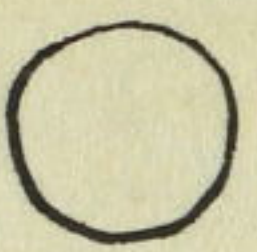
眉かきよ居風各用あり 郊の時言ふれ
侍といふ山あよ花の教り風情面白
し且消まき水をこし田むるハ上川の
の常なり^{ひら}綾といふ^{ひら}又風流

廊下ハ友の影はくまへ 童五

湯あつ通りの廊うらんも等の山花
はらりかてよ花流よまより^{ひら}唐庭の^{ひら}風色
眼中よあり友の影つよよとハ穴稿よ
藤氏の殿作といふなりて^{ひら}祝詞を

ふくゆる笑平夕ともいふらん

其二



おもくとも杜季いよく衣をもあつらん

初雪此ことも袴着てくる 野水

端書の意味は志をく職をも退久と成

りとも壮年の方のむきかすの衣を挿て

去よ思ひはしむる悲なるよはたしむる

あつらんそはゆきよのこもかふるは

即事のとるの斗のゆると唱^{うた}はし同

袴着てとる渠うこも袴脱する

思ひをもちる感^{あは}れを感^{あは}れを

急せよる滑^なる袴をへ

せ相よあつらん初雪の食 杜玉

翁の言^{こと}は初雪よあは食く思ふ

とらふあつらんあつらんよの初雪

るぬは空よ食く思ふ義^ぎ理^りを無用

の力を認めぬものか、杜若も又まよひ
ひとまよひ境界まよひの已の素意を本ん
とて又まよひるといふ他まよひ

聖王菊まよひる蝶のおをれて 芭蕉
聖まよひとて居るまよひ風籬よくりま
いと蝶おをれてまよひ風籬よつ折る
お菊まよひるの境界を 聖まよひてつり
らん樂天ハ神をやまひ老杜ハ齋
くるとまよひ ○右三言十言常の附

合よハ是のまよひつり 聖水あふまよひ

境界をまよひるまよひ 杜若もまよひおろり
境界をまよひるまよひ 杜若もまよひおろり
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる

鶉ふまよひと車ひまよひる 芭蕉

まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる
まよひるまよひるまよひるまよひるまよひる

麻呂の月袖の鞞鼓を習すん 重五
麻呂の語きて乗車より交せり鞞鼓
を習す月よ魚も風情樂楽を
推乃へあつくいふ家元の老なり

桃花とたもる貞徳の富 正平

貞徳選の巾傘とつる連式よ麻呂
くよの自稱多し別口を長歌
九とよさるより初所よりひえくは借
号を^呼機^のことの中鞞鼓となすは

を上巳の宴とらんで桃園のおひをり
るや又富とりつるは人富あるそ
洛外よ五箇の別荘ありとそ所
謂 梅園桃園芍薬園 柿園芋の園を
雨にゆる浅香の田をりて多て 杜玉

浅香の流は貞列の句他は古歌のくら入
庭家の池より一高きん千里を遠
とせさる富の字り庭せり長櫃の萩
雄波の汐るとり西影きて実るのみ

あらさめりをりしうめてはくめてな
らんり卫メ音角ん

奥のきりし記をくく泣よなく聖水

奥のまを指して即ちなる奥の如月

を許す烈一田一をもさる中の凍

~~半もと泣いなるもか形容す~~

掘埋て終りふしとあん

床ふけて寝れは従事らるる力あき

さらのくおのお女玉相の客のちうしく

寝らひんつれは垣かあてみくるとこの

衣又さよそくこの母人そまきるとあ

ちめてさるま、歎くさるよ執事を替り

奥のよさう記を泣くとふの泣くこれら

縁さめしけの恨のこつと—— 芭蕉

花燭の扱れ床は替れさとは縁の媒

あふ女よかると難何うるも告るもの

あつて志きく交しも虚説は極まる婚

儀とるれる扱後あひくねは告る者か

従方らるとあるよ意味を行くし
より天越の禱より祈るをと換骨の
説とも女の恨のいとこは残ぬの妨り
無想より起るん

はもしと病をちきり力なき、聖水
薬のさきよげる物を下り、病み替り
附之変はる集をり

おさりの歌より首おさるせん 重五
奸臣朝よぬさくして目の前の病よ治し

くれと上晴しして黙るよ力るくれお詮
られ死して忠誠を今よせんと覚悟あ
り楠公の侍も乃るし一我死もく
きとしよし我首おさるせんとうるう
能活るり

小三太よ不盡くせいとくしむ 芭蕉
故々へ記念心遺書なと持せきりし
名残の宴とくゆ常は自若くする所
説はる集なるり

月もまじりぬ牡丹ぬす人 杜國

あつたれ仕課せて来よと初夜ひして
せつを許すあつたをえり無道よ人の
妻子を奪ひある人質ると盗とあも
あつた白と赤越さるれ牡丹よかくぬす
比真のよぬ志ぞく征例ありうりあや
むらね實をほそく潤達の作感すし
縄綱のかくすれ破れぬちおらて 室五
牡丹あるふ鞠うさのきとこころうら

そ土塚をりつるなまへ一破りもあつ
もぬすもよ役あるの跡あり

こつくものみ地なきる所 後
草花根の縄綱とらん破をのり
しはまゆと轉してかくは跡あり

初花のせとともや娘のうらや 杜國

所よりこころあつたをせらるるよ花のせそ
とこ所さし虚安あり

赤いくのまそかひゆよ 聖水

いふやうくの世もあつて侍女よの童は
るとかいつくの娘君の花は又の陽をせん
いくつ六年 齋ちのり

松をこよ餅もゆるさ幸ちのころの 為号

お里の未れこいともれをさむおの
餅を運びもゆるささうなるをさき
ふのこ味おのをも変化し 本をさ

雪の起む代中燭さかりして 芭蕉

圍のあつてつらふをさきさるくをさ

お餅をさぬい寒中よりさるをさ
出にそのものと

こ條ぬく楸ハ柿の昔中さびし 那水

帝燭があつてつらふをさきさるくをさ
いりり 柿もさきさるくをさきさるくをさ
いりり 柿もさきさるくをさきさるくをさ

三味線さるん不破の関人 彦五

おのをもさきさるくをさきさるくをさ
とまうをさきさるくをさきさるくをさ

関人ハ里人ト云ク

乃ト云ク員流テ打クモ亡命ト云ク是也

爰ガク打テ不破ト云ク是也

相シモクニ味染ルモ按排御中

森若クノワテモ七十 杜玉

茂苗由其名も忘れさりしと云ク

親モ一語ニ云ク先ハ親向ク

森若ハク信クワレハ祇申ク

森かめハ御堂ニ云ク○打クハ重五

老ノ作業をいフ種取ルト云ク旅ノ

森若ト云テ合カク賦を記ク

之を合ハサテ尚ク作ル森若

所テ森若ト所不遠クハ味申

自他取捨

モトノ今年ノ下ニ云ク次 為ク

森加カモ産ノゆカクモ本

森若ノ場も異ナクハ

一向門ノ信心ヨリ

蓮池よ詠らるの子抱ふくもる 杜玉
る中の糸を助る附く晴る荷葉の
下よ詠らるる此こそうと 風情前句のな
よ互思もく 妙くさては堂よ蓮池也
越ちと籠をえきし水堂の夕此おし附る
籠屋よ抱るるさるればなを葉よ福を
るか葉池る院よ浪んや
宮よまつく 荷格をともく 聖水
池水と紙添とちらみありまつく 海と

しる 産葉よあは人ふゆし
月よまてる 唐舞の髪の赤くして 詠ら
海志やゆき 神よ轉せりまつくの夜を
処りてま人を定む 草人の雅物と
志せぬまめ 臨濟をまら 芭蕉
臨濟ハ黄檗稀運禪師也母りて臨濟
を慕ひしと 祿禄まの月よまてるとい
るを人ま川風情ありとんるし 母の臨濟
のまぬを石して詠らるるまの附あり

碓氷を征のまことしそ思ふるよなせめと
しめて子をまら情をあらりぬふも凡
意のなるまよはありけ赤くしたるの預
よくそれより説ハ換骨こ

秋蟬の虚は老きく閑さハ 聖水

人まらまの寂寥をいり程きく
まくの程味ハ陰済のくつこ

菖のうたはくふ雪下ちりちり 室吉

閑るまはまらりりきことあせり

杖より硯をひくく山陰牙 芭蕉

騷客とももを硯よある神ありし
説ハ神用なり

ひとり^{スケ}典待の局内侍々 杜玉

建禮門院侍為飾の存佐局^{スケ}何波内侍

と小原は位夕ひ花摘は山移り付のふこと
なと平家物語も当り小原侍

幸の人このまきく入付ゆし新らん

三ヶの花鶴鶴尾長のもるいさま

二人の官女と云ふ所のをりしは 西海の軍甲ある
三月三日 關原の節會にまじりて由ひは
時とん動していろの字とありやニテの花と
かき作しりまじりて又は巻の巻向御
其の昔白服才三ふころの境界と云ふと祢まの
三月三日 三人の音人界をまじりて三月の
白ひらるる 但分他ハ三日の花として關原の節
花と作し おのく 洒落をまじりて
會とんをせむる軍とハらるものり
も軍とハらる けしんを白ひのをり

もねふかす 但まふの結ひは

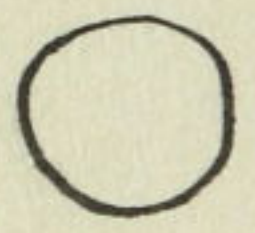
馬と内侍へ鶴を尾長を射し

はまのり

たつ 結ひいさむ 越の福活がり 高号

三月三日 越後 獨活川の神事と云ふ
あふと公家武家の儀いと云うて 宴會盛つ趣の
まじりて 由ひはいろしむと云ふ人まじりて
藤原の白首と云ふ ことと念ふあり起すの由り
けしん けしん 飾物の風情も
まじりて 古人の名あり 獨活川に花
かき作しりまじりて 諸をまじりて
三月三日 三日の死に因りありて
けしん 越の人傳を 論を
して 越と論せん

其三



杖をひくと僅に十歩

清くして月より影もを教つる杜玉

まら黒いよをほひはくもも十歩とるぬよ

勿心月光の地よ清なるふせい折るれ

くもを教の空のまら阿ー阿りてー記

光京をとりり 我徳の包も光ありとらるるかの
眼もよりり

氷ぬゆくぬのりるつる 重五

月下よ氷の心寄るりさぬを飛空へー

得るり

歯乃木の芽あを初轉人の矢よ肩て聖水

阿ーさよ轉ると歯乃あを矢よおよと

ふよ漱きさぬなるん高まることと

てりるや夕祈ふけさ まよりり

自物をおれ

小の清門をとおー明のまら 芭蕉

馬よふ物をひうせ敷ことおまのふ

佛持をくめとて入て附れん
ふしの風情をわらわしといふ
あもよめり

る番異りく病の風のあすみ 為号
お掃除をとり地紙取の板かき
る狎扇の風をうけの文をせいの字
ふい掃きさす土をうきとてん

茶の湯をとりむせきのえり 正平
あつと歌歌のさぬとてんわらわし

笑をとりり塵埃の様をて挿花の
不用るるをとりむのさす

うけの物もむねかいつきてまを
利休のかるもむねありしとやこれ
起情の附をうけりけの上膳
らーきやなり

焼のあつり又情くぬる 杜玉
むしハ掃きよひとく女子の門
焼のあつりかアと哥林良枝よえゆふ

くつ加、一、炊籠のそちのつや
ん、ゆきとあひ、ひたりきるたも、くく
ち、秋の角力ちくくを、探られを、芭蕉
炊籠み、秋を、物よ、表向の、あこ、越と、ハ
又、秋と、秋との、相りうて、美、き、そら
さけの、くらま、けい、を、さ、次、よ、探、く、し
と、二、夕、か、く、も、の、二、夕、一、こ、よ、所、の、つ、り
ち、は、た、つ、一、一、強、く、角、力、の、二、字、秋、の、艶
な、あ、と、一、敵、を、と

若、ろ、妻、さ、く、ま、一、滋、加、笑、樂、の、坊、聖、水
滋、加、笑、樂、の、地、谷、こ、江、列、ま、あ、り、坊、ハ、寺
院、あ、り、を、ち、庭、の、秋、と、ん、く、り、か、く、物、く
取、一、妻、化、系、と、る、一、そ、の、ま、き、ハ、時、を
の、れ、合、な、り、一、或、説、よ、北、西、の、侍、松、波、加、と、利
と、り、る、こ、の、女、よ、ま、さ、り、く、れ、宗、師、と、り、て
滋、加、笑、樂、く、坊、と、号、せ、一、と、そ
秋、月、取、雛、及、六、井、の、猿、舞、て、杜、玉
坊、よ、や、と、う、一、所、こ、む、一、あ、れ、此、よ

ついでに香いよきて花てもてる次山城あり

紅葉舟よりふりよほとくきんづ 茲等

みんてつては種々あり方々の所々をみては驚くも味くぬ京者
鎌倉六井のゆかりありて種々も男も女のあり
かへてはしる所ありてはもい猶も男も女のありては
ゆきかたなり

君ふらのつとことして 離れをひらみる 聖水

爰まで判者いする 紅粉とてきて 離れを

彩りするの 附きよき

命婦の君より平本みるんとこそや 重五

命婦ハ女官のたふ同曹日るよの 離れを

福京
波るらん

まのまてまて 津波のふよ山吹あり 荷ろ

米を端々の用 海道は都ありては

佛冷らふくく魚ちとこそなり 芭蕉

ありハ津浪の即村のさぬ 當りては

へ一袖よ変化をもくハ 鹿町 糺

縣あり 花見次郎と仰られて 重五

邑里よ古来の豪族とくも百里を動

くす 志んをこししては 名を呼ぶよある

一厨は多くの魚をちとて不思儀の
しよと申さるると傳ふしと人日向の
國は人まゝと語り説あり

五形をうれの白田六反 杜國

おのれう白田のしよと申さるれは
も念とちて狂言るとおとみる神の
人るしと物うぬ生笑めて村中より
傳ふやと戲ふしと申さるれは
良^民潔のおとろひしと申さるれは

うけくはと申さるれは 芭蕉

おのれう白田のしよと申さるれは

まひるの馬のしよと申さるれは 聖水

二夕暖和の光景聖水のしよと申さるれは

思ふや矢刻の橋はと申さるれは 杜玉

しよと申さるれはと申さるれは

衣冠のしよと申さるれは 芭蕉

哉當のしよと申さるれはと申さるれは

此かゝる大橋の用杖ふなうしをかきし

おくら川の傍ろしむり武隅の松を伐て
名取川の橋杭ふるせぬと又言子保の
以まして矢知るる庄屋の庭よ名を松
松ありて往來の人の足をとこりや
りけられぬ合せての趣向なるなり

捨 子ハ本川へけ又伸つん 聖水

あやれ松の字を言のふ又換寄して
矢矧の庄屋よ居る松ハあつむり捨
ふことの二句かきみの傍ろしむり

の時分松のぬるとやとぎの長らぬよ
出来し子をこそまのふあつむり捨
もやうこ志つるを捨しをり了後
那方く川人のあつむりも重衡牛
若等寺の侍もあつむりあやハ昂初也
りして南向ハ昂歌ハ歌味も御
後白川の川も子ハ這よとよ一を成
りりの御製を捨して余情流るに

鳴るをそとく刀をさるるなり 重五

せめてあの子うらむとよひ物さ
又と見る一尾ぬらちうせし
人の妻ま月くもきも阿もる柳と
りり

雪の狂吳の玉れは之めつし記 茲号
他邦よ客よれとも多只困よ居せん佳
境んのちよよ碎ねをよのしむていの家
雄をりりあ二句のうたを却権を

笠重吳天雪 秋惠宗

襟多し一なる雄う片袖もしく 芭蕉

け二句頃城よ夏表まもて角田川を介
流く飛くく風情ありあをを轉
して大壺の戲言とよ高人の襟ふ
あこよ赤樹の袖を解もると彼の候
れ侍をもかんくくを又打越のうたを
ちとらう 向嶋ハ吉原と江水を隅川
東都よ雪を山貴もるの地

仇人と樽を根よ飲ぬえ 室子

飲之酒よ死るんとりふりり 凡人とりりる
西をい 昂言る尾をさす 二句を放
称するよ 絶さう 秋候の西歌

聖岳西采のひとくよ名をこを次禪社玉

け漢名利を捨ると遊色よりも捨ふ大快満喜の程所を
戒を犯せり 戒を犯すは 名をさすを次
かゝるあやふけ 弘向あるまきまの目をと 或はまきま
ゆきり 聖岳西采のひとくよ名をこを次といふ
は 二句を放す 此の文なり
中村詞とらん

三日の月東はくくく 障のきり 芭蕉
林儿刹とらんて 障をあらひくく

ひそくは凡俗の物なり ことばを白又
名をこを次の御者 之 笑ふれりる 茂子

烟のきりふ 風色ぬきふへー

秋湖かすうよ 琴今く 聖水

幽の貴侯のきき又 琴今のきき 加す
後舟よききと 情んて 浮きし

樂ホ天々 琴比 琴行の 風情又 琴今

琴今 ことごと 琴今を 放る 杜玉

琴今 約きし ことごと 琴今を 放る 放生
琴今を 昇る 底の人 琴今を 放生

云のまゝもかして秋とよ

知くよまゝに佛の教をもなつて

堂寺よ也ふ池水るとえらん念佛よ恥て

放てるの所なり

影くよまゝに秋とよ起して 聖水

一市目るとよ秋とよめをすまふなま

かふるさむをいり

思ひの川もあつて常川 五

火をくすやましく入ると思つたまふ

さめらうと女のおひくひる

ひく時思ひの人と節て延べ

ちる

こうしひききあるもの伝へ入

東の常川を常陸常とてんるせり

此の神をいひし事未嫁する女

名と教の書く書きて席の神あり

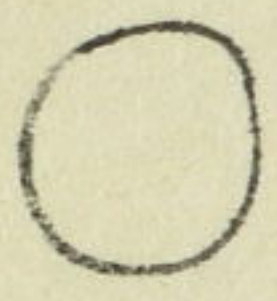
折きてりんるよまゝ書く

流ひの川とすよそあふ

男ありて魂の力に流るるさへ
をりり男を仰花よ比す但これハ
帯もむうんとお執るよハありん
まい人よおのりんこの神る人まの
そのるまのりんとあもたなすく道蓮
西行の初よりいあゆまよてまら死
なんそのまのりんとあもたなすく
りる詠ありあてそ涅槃の月よ
往生のまの懐をもよのりかく花を

こうれあハな死魂もさそそを陰を
なん入つてあんとまのりんとあ
あもそよはあをそえくそあ
されなるああんと風物そあ
ひのあんああんとああを
おさくそあを持せそあ

其四



難波はよき火をくむを正しけむと

炭賣のおの妻丁そまう先重五

万葉集なるはあは火をくむを正しけむと

木の妻丁そまうなる人磨家ハキ

火よまけけむと妻丁そ白くまひるまう

常のちつしとことハ常として此のまの

生可くとえぬハかハ金ぞ炭賣ハ已し

妻の思きまうよサ火をくむの妻しとぞ

思ふんとこそあつめとさハなまのよを

よの思きまうよサ火をくむの妻しとぞ

人を取まうよ小人の情を比興あり世を

諷むもの古語も奸ハ奸をさう邪ハ

邪をさう善賢ハ善をさう次とて

人の化粧ひをかみ麻をまき 後号

炭賣又隣麻石封附色の思きといふ

より化粧といひむらぬんさて意味ハ已

貌のまじりなきを磨く心はうけて人の力
をたかなむ隣をのこ研くはまをこころを
よそる不視を可して教むとまじり又對す

花は棘ふるおりの雪相と咲くより 杜若

郊原のまじりもつれせり海は化粧のまじりと
摘て雪相中と咲くは棘の花よりまじり
まじり人界の無常をよみられて臭穢の力を
白粉も粧ひ飾るは馬車もよ霜をよ
るまじりまじりの顔相もよまじりまじりの神

をまじりはまじりのまじりまじりまじりまじり
まじり

雀入る虫の月うすこのまじり 聖水

あつちをまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり

風ふうぬ秋の日瓶と何るまじり 色雀

淵明九月九日無酒見首衣人乃王弘送
酒おとつ詠よ王弘使立晩花前
これの酒をまじりまじりまじりまじりまじり

人と見る一執命のまゝなり月と
秋織のまゝと一布のぬもる 和は
龍を化する一庵居士迄を織する
傍におもひをよせはぬ 問は
酒を求むればと託 ぬる金信のぬ
らむるはあつても

加茂川や胡麻子代糸や道一 萩
秋のまゝとよもるぬもるの
加茂の末社は胡麻子代糸あり

氏子胡二と秋をとて

岩倉の知年なつ一の以 五

加茂も岩倉も洛小の糸はまぬ
つれをよもると母人あら女子

ひよと布摺のまゝと水

いまは嫁りせよ知年とて
よさするぬもと布摺曰士乃多
く風情をいふ

くまいたを越るまの 杜

孫をいふ女のさやうにて為のよこごと
せり他と自ら辨し越の海なり

控られてくねるうねるのてるれきの羽に立
くねるハ恨むく醜婦男は控られ
さめると比奥一りり

火おろぬ巨燧たのましく人もらんこ道直
とろれきるをまよおれ者となして
さすももんさくさくさくさく火おろぬ
巨燧とらふハ不用の成しもの義をあら

ハ次常くハ巨燧よまろそくれるうとそ
侍の恋しくそよ木を引よせさる風情
ろらん控し御の生を死は換骨しぬ
まハ折越の外台あり

門守の義は紙をかくてある 重立
保更までおひして巴右衛門入りの風情
うらうらなまろ人をもんこらるを書あ
おろ折し美人ともんこらん

血刀かきし月の晴まきよ 夜半

父兄の歌ると人をきかす討果してこそ
おをも忍ぶる社うらん本まを遂ぐる
ま、人を思ふやと見るせし二句かゝるの
附なるより折紙の諷刺

二部ありて本々のうらみセツましく 初号
あや換骨うれはよ奪してセツまこと
附くむ道端のまゝまとも月啼く
まがまぢてまのくま便ある社地名
又徴中

ふゆま川細をくくならく一 聖水
地よももやう

花よ泣さくくの徴心と控まくり 芭蕉
あやの人をぬきまといのひてゐるまの
花を執向一のまらおのま、款ま流し
世を控ゆるなまよきもあめと徴
のうまさぶらうねハ細評まあくら
原本かんぬか

偽ものつをん山吹を 欽 羽笠

これ即欵きよあひも人をとけりかせ
又你く佛羅よ入て樹下石上のをよ
又溪水を飲むの風情なる、并に
かくくちまふしとて他のふしを
さ印かりして福なり

白燕みうぬ水よ羽をばひ 為方
山居の言傍の祝念静坐のよをなと
又て清き世多を對一濁ぬと
作まら水ハ山吹よ睨とあり白燕ハ深山

清浄の地よまじそのとそ

室者かしく 釵を誇る 重五

沐浴よ力を清むる人と 起暁に 敷

の釵を誇るといふかしくかかじ
けるまじし

八十年をこえりんる童母もちて 聖水

佛初冠の釵こしんあし 袈裟で長壽の

職人とも 取のつれとらふや 八十年三ツ

二百四十歳なるまことつるおしめえ

つる

たのつさち初る七夕のつる 杜玉
母を仙女なとんて所さん大虚
不思議の曲やと云へー 釵はる
の海るるれハるよ先世女の昔ある
娘をいひて三夕の自他をいつてるよ
返返る歎せきんや

西南子 桂の花のつるも時 羽衣
桂の花ハ月のまふこせりの月れあるよ

あるハるるるー 時のまよくあると
結るうね新婦の歡ひよ花のなまむと
いつる空るま

蘭のあやよノ木うつる 芭蕉

桂と蘭と薰物をもよぶのく詩文よ
灸も文字をも對するのほろり ちの油
漢土あてさるよ 甲ゆ蘭花とつみて
ふるるも物とそそ又婦人の形なよほる
いつれも香氣をも貴るるなる

後つちのひつらるる女つんで踊る重五
昂メ木う川あるらんなるさる
るるより受るる女とハリ

初瓶よ西来るとはつりの毛る
その女の能つらり西来とつる賢女よ意は
ちやり生て梅子踊るふりよ社
聖愛のさくひをやり正月の行り
川毎よ花を柳るなるてあると
餅化の西来とつるさるつり

教きむあるる年さぶの宮を 聖水

あると蝦夷ちうきりりのも
見て糸さぶの宮とハリるる教よ命
物まゆるとよるるちう正月のねひる

寅のりれ目と瓶注のくちて 芭蕉

神樂あるとある日とて指さるるの
寅のりれその宮の訪るる又瓶注の
も。日るる目と瓶注を作ると祈る
やうの神となり

雨云かくまうく南条の地 羽笠

地のまづつちと仮名を附する在り
皮らるるは土のまをさしきよこしハ土地
の土のまの落くるまや南条ハ土不良
いづるまじん細治多き所なるれハなり
そかしくまじきとハまづかの地をそん
くまのまこ又あ〜のくまを洞く

田垣して待ともまぬ人の像 若草

まろくちん南条の地と云ふ
南条の郊外ハ和太納吉殿像田雜
りつり太古神聖の尊廟ある所と云ふ

此の地と云ふは

〜世のかさりつり

泥子ころの清き芹の根 重子

清きもあまふとかし海本南条の
地ハ古賢の像
昂祭供らん法
社もあまふ
弘明教系の本例あり

粥まくるあつる泥よか〜あり 聖水

まき木子出より花を引より粥ハ昂芹
葉をこま〜はる人目の粥る心の清きと

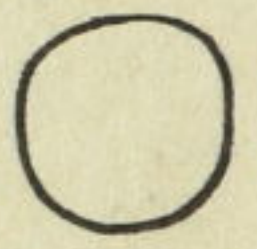
しつゝ時天は起て威儀を相ひ
中へける御音えといもれれこれ心の花
物衣のしよは陰よりしよるうせ 老蕉
あるよかゝるるとしつゝよのうと老望
の花の御階のよももる出陣の山越を
拳をこもる楠帯刀のよそひとも見
るつき御の附るのうり七種の粥を
陣中の粥は物心の花をさく花は
換つて自然を失ひさる絶ぬ感はまじ

小の力をなくく心算おーやうておま
おまをえ送のよまの永のむりの
侍ともいそん

おれぬまをせむる 村雨 杜玉

おまのひと形容して二句一とすま
を責るといふ村る いふはまのふたふた
用あり 用あり

其五



田家眺る

五ね月や鶴のいこさるみみて 後
雪相をぬく氷さるるちの田つま
氷良もやしてけさのさけりあつはつくと
さ居るさあふらん詞集言葉の巧
をかさるるさ感情ささるるいハ
ニキの音ツクみあし和訓夕、ズムなり

あゝのねりのさるれちうらみ 芭蕉

哀の字鶴のさるるもかきうねりのこと
りひてぬぬるの風をさ補ひあふこと
限る一徳も無双の脇とさ一々集の
題号も世脇うらみとさ後あふささ
あふさ依借の奇ともいふんとさ
ささるるさ

松山家の神と木の葉も降重五
うささ山あふささ教奇をのさる根

植の霜影のうろつきしを

くすぬらてむなるもの文字留す

ひきはる年の臨をれは 杜玉

愛まハ天の山路とるしそ花葉ホの

そとこはもこりし初くはく味

りし

音もたのき具は月のはくと羽笠

枚を合しお射の兵ともなる作

の枕中移しあると牛し

現をろしてなく臨のこをれ

さゆとんらん為のうんをて心を

月の余情もあるん

夕とるしらん蘭きりしそ 聖水

音らきの枕はよ月あり大将の具

の席上は飾ある新時天はお陣の

酒官女らん蘭切の枕義経の勝浦

の名を伝ふの比ひ

秋の比旅の比連なりといふは芭蕉

武を文と轉せり主上仙洞の所遊と
つるし一諸ぬへおのよも席をくの
旅をり

澁もれて留士らゆる土寸 羨ぞ

其地なり 樋倉の代の所旅りなと

又尋らるや

寂として桂の木の影る者 杜國

小寺より轉して幽室をのぶ

葉を系おとそそむる風の音 主上

系おも花のらろひよ色あつる系の子
より深るといそり風の音は羨むのを
猶よぬは鏡の竿叶もらゆらん

雉子遊は烏帽子の女五十三 聖水

あつるを聖水の事をとらて雉子遊と云
向し一玄宗の侍女あやうしてる物せさあ
めは侍をやらせらん烏帽子の女といふ
官女らるるをたつを人の子然るるを
たつるを和風の風俗といひ且鄙言を用

ひさる御階のおりみ船とて一々さて
女は烏帽子とりひひり又うき淫樂後のおも
を執向りハ昔里空習佳とりひ一人向き
縁をとりてちくは深まを悲しめ
ときらハ正の神の愛もるを歎くの語
を故事もとりあふの多おを深まを
いつるを悲情せしめりん
庭よ本常作る丁ひの唐衣 相笠
白拍子ハ四舞と号して太刀を佩き

烏帽をとぎるされハ烏帽子の女とて
を白拍子とらんカ 五之十 駈集一を義
仲平家をと追慕して都は伎樂を極し
さめりて木常の二字をハ歌ハせる
庭よ本常作ると故を思ひしを念
めり世よ東海乃五十二次ると園中よ
播磨のしとく信蜀の風系を播磨
飛禽走獸もおのつとておろちを
廣大なる筑山とておろちを狩の志

なり面白く為るハ昂白拍子のうら
恋の字ハ女色よまをさめりの結ひひひ常書
ニテ一章の化例と云々 藤ノ寓言の自在抄と云々
自在感心抄

夏涼子 山栴又はうらん 為号

弗樂山の風連橋橋をひらきと

ハ不置のとらわりの藤山者藤山は藤山す

冊子の本をせし

麻川と云ふのはあむ 道蓮

あると本の用の本の並ぬ

法師の傳と云ふのけの傳の並ぬ

十と云ふの傳の並ぬ

もの傳の並ぬ

のの傳の並ぬ

後の傳の並ぬ

うの傳の並ぬ

本の傳の並ぬ

和の傳の並ぬ

江と云く 獨樂と云と世と捨て まま

佳ホあむの夕の右と云との傳の並ぬ

なつたハ龍舟の舟を真大の山は換
寄し舟をよみよふを舟とてひいと踏
味ひつる

あう月およカハおをるる。 杜玉

表ハ江よ月のん合でましく昔をなを
を移るの舟かくて五濁めれば
るよ真如の月の照せよかしく移る
味しりの初れ式部くくしり
たまそ入ぬきとるよてせ山の露の月

と移るよ似てく三句ハ布祿の舟
龍衣望よ旅あともおをるひ ねえ
龍あよ月まつお行の移くまふ
あまよ由教成の移るよと西
影るん

龍傳らゆるよ木瓜の山あひ 夢水
くま世のつひてよ一曲美たてやると
ありしは転く傳らるよまはつせ
祢よ所らるる雲上の罪人と

ゆる枯寄りもつる。新。ありとも色林首
まはるしと記して附きたる。意よふを奪れ
瑞り。新。首ももつる。のまはるの
空のくさき。流。よ。尾もひく。流
水の折。浅。田。よ。た。え。る。ま。あ。ま。よ。ら。ん
水。き。よ。ま。し。じ。あ。の。く。さ。り。重。立

あ。の。く。さ。り。と。ま。ら。光。の。流。の。水。き。も。金
め。る。し。と。一。鯉。よ。水。き。の。流。の。田。武。の
就。舟。よ。白。魚。の。そ。入。る。も。な。ま。も。ん

こもよてる。海。の小。角。豆。の。花。も。り。聖。水
トよてりハ異の。ゆ。あ。ら。ん。○
皇。極。帝。南。淵。よ。雨。も。め。り。と。し。る。ま
風。情。さ。し。ん。水。の。く。さ。り。厨。旦。有。る。い。と。い
春。よ。と。物。も。し。と。う

空。を。る。お。も。し。と。山。灰。を。は。く。向。羽。を
二。の。城。み。の。光。宗。と。い。も。ん
聖。岳。西。来。尼。の。少。坊。よ。ま。ま。井。野。て。高。号
何。き。あ。寺。の。托。鉢。も。し。と。し。と。一
も。し。と。蓮。の。う。ま。い。し。と。し。と。蓮。の。う。ま。い。蓮。意

あふを掃除日るよの風信よ静も

静きの飯まのそく月のまゝ 重立

おられて食事もしる者るんは所坊

このお敷よ飯まをとりしる拙排を奪ん

うれしよの衣な例よ勤なりてと云ふ

卯一飯よ飯まを寺屋のおとのしる

つゝい

家おく狐風や悲心 杜玉

祝ふもの狐と海まをう家をむかひはる

約榜又危ねふれする片底 羽笠

狐の福らふくき約榜をとりて云せさ

人ハ赤紙をも箱をも置かれと飯まを

取くハ人をもと狐と換ふるよ其奴

ひ品を所て衣な阿うかやくるよハ

設て人をも阿やいぬ曲まといさる

卯一ハ即はく榜のほじらるるま

豆之腐成うて母の喪よ入 聖水

まらをも喪をみるよの阿く喪をハ

片社又作るものこそ幾田きよ
農家あるともあるし可作ぬ日
一々の寂ま亦も

元政のよまの袂もやれぬし 芭蕉
深草の元政法師母も携りて力込山
まじりし紀行あるこそ孝行の人とぞ
由流またもとをくらむんとぞ

伏見本情の隣に花をうけ 高き
深草の伏見本情の晩鐘もゆか

陣しつちの次入るとしる伝説を
風流の元政法師をきくと世にむの
余情あるはあまの入相のうら
あやちとんとあり

色めつそ、四方梅ひらりと旅して杜若
美代り、四方梅とあやめて建ひゆらん
白比よ梅をこそおとしの隣あり

まきの白洲よある梅をよみ さま
いとよき梅と女三の宮の梅

あふとんちりて庭へ下りてくるそと
まよふの影ありて二句のふるま柏木を
思ふの余情をゆくまゝ

水千と秀白の石をわうやう 野水

蹴鞠のよそよそを掃きとてあ
干とハッるや且秀白の石と強
やハハ集巻歌のおぬるま狂言の
芥と出せその白ひららんけし花
を川よてさる曲さりとあたるよ以新を

魚

山菜花白ふのこころ 羽衣

きよとる協の白ひなう 但し附ハ秀
白此取とてさる人ハ美人とて
吳體の人と對せりとるる

追加

いらふとも頼西しをく川を敬羽並
ひこほしく強きと致るも形容や台こ
上のおみまハその目をももめちあめ
のらんよ思ひひさし思ひもあひりし
初より相情あるまは信在のまよひ
くり且質物をくりけをて連立の
記を述ぐれと云々

檜火子あゆむ枯原の松 蔭す

昔の通一牛として三泊四泊の場所をも
培来るも美る阿のそれおとあゆ
さゆをいづるや飯も山登りかき酒
まよとくまよくま求てきまひりる
一枯枝を拾きて檜を何ゆ
なると風流ふんわれと境とつら
まよとくまよ

木城川下流の松を葉冬までまよ
あゆむと信流るるる流るるつら

うら 謡の人此もそひも 顯し〜
おぬらの質貝れを 轉すを白衣と
指母貝る〜

檜 笠よ宮をもやつとも ねるゑ 杜ふ
茶を飲むるもと世をもんかきりし大
ま人とらんか〜まかうれあ〜あまり
のあまをも ねのまきれよ又りちり
倡引か〜ま〜も〜 風情と附
るせ〜 松笠ハ本音の産物く

白浪と鈴かちん 月あゝ海 芭蕉
供一のよ人も二人三人かあ〜るん忘る〜
は買んとおあると云おもあきり
月のぬとほけのふ 風洞感する〜 飯なり
ひつりよ橋をもとす 岐阜山 聖水
ねの本のる〜も〜り〜る新 月あ
南ぬよ出〜ふなる〜 白浪よかちん
の祝織田家在城の時のあ〜る〜

